

---

# アヤカシもどきの集う場所

ぶらむ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アヤカシもどきの集う場所

### 【Zマーク】

Z8782Z

### 【作者名】

ぱらむ

### 【あらすじ】

ある秘密を背負った少女、遊憂。

遊憂は、とある館に移住したのだが、そこに待ち受けっていたのは不思議な（奇妙な？）人たちだった！

大昔のことですぞこます…。

かつて、アヤカシと人間が共存出来ていたころ…。

人々とアヤカシ、アヤカシと人々。

それは、引き裂こうとしても引き裂けない関係で結ばれておりました。

人々はアヤカシに『生命力』…いわゆる、アヤカシにとつての『命の根源』を分け…

アヤカシは『自然の波長』を創り上げ、人間達の暮らしに関わる川、山などを守つていたのです。

しかし、ある日を境に、その関係は、もろく崩れていきました。

ある人間の女と、アヤカシの男。

この2人は愛し合い、そして、子を産みました。

その子は、アヤカシにとつての命の根源、人間に欠かせぬ自然の波長。

この一つを創り上げることができたのです。

それが仇となり、2つの種族は互いを必要としなくなりました。

結局、子はアヤカシ側へ行き、人間は暮らしを守るため、文明を築きました。

こうして、ずっと続いてきた2つの種族の関係は薄れ、やがて消えていったのです…。

そして、時は平成。

ある少女のお話が、今、始まります。

誘坐来 遊戯と彌権館（前書き）

え  
え  
すいません。  
読みにくいかも  
え  
え

## 誘坐来 遊憂と彪櫻館

オレはいま、巨大な館の前にいる。

オレの名は誘坐来 遊憂。

やたら「ゆう」が多いが、まあ、そこは気にしないでくれ。  
さつきからオレとか言つてるが、オレは女だ。

12歳だ。

子供だ。

女だ。（大事なことだから、2回言つたぞ。b y 遊憂）

まあ、オレの姿は……。

よく可愛いつて言われる。

紫のロングなんだが……面倒臭いから、よく後ろで一つにまとめてる。  
今日はまとめてないが。

服は……よく着るのが白と黒系。

きょうは珍しい赤だ。

よくスカートを着る。

それはともかく……

オレの前にある館は、彪櫻館あやかしやかんといつらしい。

この街では超有名なのだ。

選び抜かれた超ラッキーな人だけが入れるらしい。

そして、今日オレは此処に入る。

かかつてこい！彪櫻館！

意味のわからない鬪志の炎を必死で消していると……

「あ！きみ？今日「コに入るひと」

気の抜けるような軽い声が聞こえた。

一人の男がデッカイ扉から出てきていた。

一言で言つと……

「チャラい……」

「おーい！聞こえてる聞こえてる！」

口から出でていたようだ。

でも口を塞ごうとする気は、無い。

「で、きみ?」

細いグリーンの瞳がオレの瞳とぶつかる。

「ああ。オレだがどうかしたか?」

「オレ」とオレが言つた途端、ビックリしたように男の瞳が揺れた。

「君、おとく女だ。」

「な~んだ…びっくりしたジャン…」

「見た目で分かるだろ?…」

「ふ~ん…と男が言い、

「ま、いいや!オレ、賽亞蛇さいあた 蟒ひび!案内役。ようこそ彪櫻館へ!」

重そうな扉を片手で開けた。

ヒヨロそうだけど、力あるんだな。

扉は鉄製っぽいし、厚みも相当ある。

ふ~ん…

にやけそうな顔を押さええる。

ガガガガ…

ここから、オレの、新しい生活が…

オレは、新しい生活に微かな期待を寄せる。

それが、すごく疲れる生活だと言つ事を、オレはまだ知らなかつた。

## 彪櫻館の正体（前書き）

長いです！！！

蝶が扉を開けると、そこにいたのは一人の少女だった。  
かわいい人だ…。

若草色の髪を結んでて、同じ若草色の瞳はきりりとつりあがつてゐる。  
でも、どこかふんわりとした雰囲気も持ちあわせてゐる不思議な少  
女だ。

「あなたが今日、此処に来た人？わたしは<sup>のがいだ</sup>遁抱いろは。よろしくね」  
わたしも案内役なの。と、握手をもとめてくるいろは。

オレは素直に手を伸ばした。

すると、いろははガツとオレの手首を掴み、眼を覗き込んできた。  
すこしびっくりしていると

「失礼。ちょっと確かめてみただけ。ビックリした？」「めんね」  
そう言い、静かに手を離した。

違う。オレが驚いたのは、いきなり手を掴まれたことではなくて……  
いろはの手がとても冷たかつたからだ。

冷え症とか、そう言う冷たさじやない。

生きている限り、感じる事のない冷たさ……  
感じてはいけない冷たさ……

そんなのをオレは確かに感じた。

それに、確かめるつて、どういう意味なんだ？

一人で考へてると、蝶といろはが前にいて

「おーい？遊憂！おいて行くぞ！」

「遊憂つていうの？おーい遊憂！」

と叫んでいた。

急いで駆けていく。

次についたのは、バカでつかい部屋。

「「」」は…」

「「遊憂の部屋」」

一瞬眼が点になる。

ここがオレの部屋？？？

コノバカデツカイヘヤガ?????

いや、ホントに一瞬だけ。

すぐに真顔に戻つて、

「ふーん…」

と言う。

たしかに、常人にとってはあり得ない事だろう。

でも、万年ポーカーフェイスのオレは一瞬で済んだ。

初対面の人には、間抜け面なんて見せたくない。

「へー…一瞬驚いただろ」

ギクツとなる。

「一瞬だけど、ちゃんとしたポカーン顔が見えたよ ギクギクツとなる。

くそ…なんで見えたんだ…！」

「ま、この部屋を見て、そんな冷静でいられる人は珍しいぞ？」

蝶のフオロー。

これで、少しだけオレの悲しみが減つた。

ほかにもいろいろ案内してもらつた。

大浴場、中庭、いろはの部屋、蝶の部屋、extra…。

最後に、中心にあるリビング…此処に住む住民の憩いの場。

ここは、住民からサウズと呼ばれている。らしい。

「実はここに連れてこいつて言われてんのよ、みんなから」

リビングにある扉は、門の扉よりは小さいものの…

それでも大きいという事には変わりない。

キキキキキイ…

それでも重そうだ。

厚みもある。

開いたら、そこには2人の人物がいた。

1人は男性、なんか…

THE 平凡つて感じ……

もう一人は女性、男性とは対象的にド派手だ。  
なんどうつ……清楚な派手さつていうか……  
言葉に表すのが難しい雰囲気を纏つていてる。

男性が口を開いた。

「僕は陽零 ようれい 粕樂つて名前。よろしく。呼び捨てでいいからね」

女性も言つた。

「アタシは團 まる ? 権那 かりな 。呼び捨てでいいわよ~」

粕樂と權那は笑顔を見せてきた。

粕樂は笑うと一気に可愛くみえる。

權那も笑うと若々しくみえる。

なんか不思議だ。

「さて、本題に入るぞ!」

蜩は大声で切り出す。

すると、にこやかに笑っていた全員の顔が真顔に戻つた。

「遊憂! こここの館の名前、覚えてるか?」

「彪櫻館でしょ? なんでそんなこと聞くの?」

粕樂と蜩は顔を見合わせ、頷いた。

なんか、意味深な行動だ。

いろはが一息ついて、

「あなたは、人間じゃないわ」

「は?」

いや、ホントに「は?」しか言えなかつた。

「いや、人間は人間なんだけど、人間じゃないっていうか……  
何を言つているんだ? この人は。」

「つまり、アヤカシと人間のハーフつてわけ

「いや、なにがつまりに繋がんの」

アヤカシ? 人間じゃない?

「話すよりみせたほうがいいだろー? いろは!」

蜩が、いろはになにかの助け舟をだす。

「あ、そつか！じゃ、私の手をよーく見ててね！」  
言われるがまま、じつ といろはの手をみていると…

またたく間にいろはの手が猫の手になつた。

「おー叫ばないのか!!」

感心する所以の如きが無い

「はあっ……はあ……で、あんた達は、なんなんだ！？」もつと詳しく述べる。

「事の始まりは昔の話なんだ…」

柏楽が、第一話の昔話の内容を教えてくれる。

「つまり、お前たちはそのアヤカシと人間の子供だと……」

「んまー やべー事になるな  
瑠璃ちゃんが怪しいー!!!

「君もなんだよ、遊憂ちゃん」

粕樂が苦笑しながら言う。

「オレも？」

「うん。此処は彪櫻館。でも実は、その子供を保護する施設なんだ」  
權那も説明してくれる。

「此処に移住したいと

「外に移住したり、希望する間に年間で、何回かの訪問がある。でも、時々、その中にアヤカシと人間の子供がまぎれる事があるのよ。私達はその子だけ此処に入る事を許可するの」

「そんで、さつきみたいに本当の事を教えるんだ」

そして、そこでオレは最初にこりはに、

「確かめる」

「じゃ、あれは……」

「うん。私、心配性なところあるから、ほんとに此処に入る資格が

あるか、確かめてみたの

「いろいろの手が冷たかったのも……」「うう。それとも、ママカソと人間の

「うん。それも、アヤカシと人間の子供にある特徴」

自分じゃ分からぬだらうけど、君も十分冷たいよ　ヒュイーンクを放ついろは。

「じゃ、改めて自己紹介をしようか。」

少し不安が生まれたが、新生活へのワクワクをオレは抑える事が出来なかつた。

オレの顔に、少し笑みが生まれていたことを、オレは知る由もなかつた。

## 私は

「じゃ、改めて…」

粕樂がオレをまっすぐ見て言つ。

「僕は陽零粕樂。お母さんがアヤカシで蛇女なんだ」

「アタシは團？權那。父さんが吸血鬼なの」

「私は遁抱いは。さつを見た通り母様が猫娘？もう娘じゃないけど」

「オレ、賽亞蛇 蟑な。親父が鴉天狗なんだ」

「へーこんなことあるんだーみたいな顔で聞いてるオレ…」

でも、ひとつ、気になる事がつた。

「で、オレは？」

言つた途端、皆が固まつた。

「うーん… それがねえ… 分からないのよ…」

「分からないんだ… ハツ（笑）」

「ねえなに今の苦笑！」

そんな会話を繰り広げていると…

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオン…！」

響く爆音。

ガラスが割れる音。

いろはの部屋の方向だ。

なにも言わなくとも、みんなもう分かつっていた。

ほとんど同じタイミングで走り出すオレ達。

もちろん方向も一致している。

アヤカシの子供じやなくとも、このせつぱつまつた空氣から… 今の状況がただ「じやない」くらいわかる。

ついた…

いるのは、見る限り男1人だけ…。

蝶が舌打ちをして、オレの横を通り

男の鳩尾を狙おうとするが、やつぱ避けられる。いろはも爪だけ猫に変えて、応戦している。

でも、權那が…

「きやつ…」

「權那！」

粕樂が駆け寄る。

そこを狙っていたかのように、蹴りをいれる男。すごい痛そうだ。

呻き声を出す粕樂。

そのまま崩れ落ちてく。

こうもあつたり倒れるものなのだらうか？

アヤカシとやらの子供なのに。

オレも戦っているが、相当強い。この男は。

1人で5人を相手にするなんて、普通だつたら出来ない。

いろはも投げ出され、床に倒れる。

(チツ…まずい)

このままでは、確実に負ける。

もう時間の問題かも知れない。

男は…まだ余裕がありそうだ。

ザワ…

…?

なんだこの胸騒ぎは。

なんか、良くないものが来るよ!つな…

ザワ…ザワ…

だんだんと近づいてくる。

『そのくらいなの？あなたの力は。』

声が聞こえる。

だれだ…！

『このままじや、負けちやうわよ？それじや、あなたのプライドが許さないんじやない？』

来るな…。来るな…！

『負けるの、嫌でしょ？』

来ないで…。

「なにこれ…」

ぼやける視界の中、蝶がゆっくり、ゆっくり、倒れていく。

『今まで、傍観者になりきつてたみたいだけど、さすがに今回は無

視できないわよねえ？』

意識が…遠くなつて…

『私にまかせて…助けてあげる。』

視界が、黒い闇に、閉ざされた。

私は（後書き）

ねえ、文才をちょうどいい

ホントウ... (前書き)

これは田線です。

## ホントウノ…

「うう…」

いろはは、一人で考えていた。

この男、強い…。

アヤカシの子供でも歯がたたないなんて…。

まず、アヤカシの子供と人間とは、体の作りが違う。人間は、生活しやすい、戦闘を計算にいれてない身体の構造になっている。

しかし、アヤカシの子供は、非常に人間の体に近いのだが… 戦闘を計算にいれてるため、脚力などが異常に発達している。だから、アヤカシの子供が人間に負けるなど、有り得ない話なのだ。

なのに…

爪だけしか変化させてないとはい、人間に負けるなんていや、こいつ、人間ではないのか…？ おなじアヤカシの子供だということも充分に有り得る。そんな事を考えていると…

「遊憂…？」

遊憂の様子がおかしい。

虚ろな目になつていて。

普段の彼女からは考えられない。なにがあつたのだろうか。

「なにこれ…」

小さく遊憂の声がきこえる。

「遊憂どうかしたの…」

今出せる声で最大限のボリュームで叫ぶ。でも、聞こえてないみたい。

「遊憂…」

再び叫ぶ。

すると、遊憂を白い煙が隠した。

煙？

炎などはだれも持っていない。

だんだんと煙が晴れていいく…。

完全に晴れた時…

そこには、9本の尾を持ち、銀の髪と銀の耳をたなびかせた少女がいた。

見かけは変わったが、彼女の漂わせている雰囲気は… そう。遊憂と同じものだった。

## 覚醒（前書き）

引き続も、いろは田線です！

「遊憂…！？」

名前を呼び掛けても、反応はない。

遊憂は、眼を細め……

「去れ」

両手を突き出し、炎を出した。

でも、青かつた。

青い炎だった。

縄のように細い炎は、男を縛りあげるように拘束する。

「ぐつ…！」

呻き声を出し、苦しむ男。

容赦がない。

遊憂は、それでも静かに…

「去らないのなら、消えろ」

手を叩いた。

すると、男を縛る炎の縄は、もつときつくなる。

「？？？」

もう見ていらねなくなつたいろは。

「遊憂！遊憂でしょ！？もうやめて。ダメだよ。死んじゃう

「そうだぜ遊憂。人殺しになるぞ？」

「蝶の言つ通りね。遊憂」

「そうだね。力ずくでも止めなくちゃね…」

上から、蝶、權那、粕樂。

いつの間に田覚めたのか、後ろで立っていた。

「…みんな…？」

眼に光を取り戻した遊憂は正気に戻つたじしへ、炎の縄を緩めた。

「遊憂！分かつたんだね。よかつた…」

さゆつと遊憂を抱きしめる。

本当に良かつた…！

半泣きになつてゐるのを悟りれないよつ、震えているのを堪える。

「オレ、なに…を…」

バタリと倒れる遊憂。

「遊憂…」

「遊憂…」

みんなで名前を呼び続けていると…

『あーあ…もうちょっとだつたのに。残念』  
頭に響いてきた言葉。

聞き覚えのない声だつた。

みんなも聞こえたらしく、あたりを見回している。

『まあいいや。またくるよ。じゃあね、遊憂…と、その友達』  
それつきり声は聞こえなくなつた。

遊憂は意識を失つていた。

みんなはずつと、その場で立ち廻へしていた。

## 謎ト変化ト体験談（前書き）

最初だけほのぼのとしてます。  
書いてみたかったんです。

## 謎ト変化ト体験談

「'つづ〜ん」

「あー！遊憂！？」

眼が覚めると、眼の前にいろはがいた。

間の距離、1？つてどこか。

…なんて冷静に分析してる場合じゃなくて、

「いろは。…近い」

「あっ、ゴメンね？じや、みんな呼びに行つてくるか？」

そう言つと、風の如く去つて行つたいろは。

何というか…その…

「…元気だな…」

「そお？」

そつ、声が聞こえた。横から。

おやむおやむ見てみると…

いろはがいた。

「速くないか！？」

「猫娘の力を使えば簡単よ」

そつか。

猫娘の子だつたつけ。

「おじつ、遊憂！生きてるか！？」

「生きてる」

「遊憂！無事？」

「無事」

「ねえ、遊憂！自分の名前覚えてるー？」

「誘坐来遊憂」

質問ラツシユキターーーー（？？？）—————

つてやつてる場合じやなくて、

「なんでそんな質問をしてるんだ？その前に、なぜオレは寝ていた

んだ？」

「覚えてないのか？」

と、蟻が言つ。

覚えてない？

オレは、あの時男と戦つていた。

で、あの声を聴いたところから記憶が無い。

「…オレになにかあつたのか」

「！」

みんなの頭の上に…が浮かぶ。

「…つたぐ、お前の勘の良さには恐れ入るぜ」

「…当たりか。当たつて欲しくなかつたが」

粕楽が、長いため息をつき、前回（詳しく述べ、「覚醒」を見てね）の事を、くわしく教えてくれた。

「…で、オレが人間じやない事が再確認できたわけか

「まーそれもあるけど…」

「きっと、あなた（遊憂）の父母ぢぢうかが、九尾の狐だったのね」

九尾の狐……。

オレが考へていると、いろはが、

「ねえ…“声”の事なんだけど…聴こえた…よね」

声？

それは、オレがあのとき聴いた声と一緒に物のものなのか？

いや、そもそも、みんなもあの声を聴いたのか？

「なあ、その声つて……」

オレは皆に説明した。

聞かせていくたび、みんなの顔が青ざめていくのが分かつた。

「『また来る』って言つてたよね…」

「？それは聴いてないが」

あ、そつか、倒れた後だもんね。と、權那が微笑む。

でも、説明はしてくれなかつた。

權那の事だらうから、負担を減らすために…とでも考へてるんだろ

う。

「なあ、もう変化できないのか？」

蟻が聞く。

オレはよく分からぬが、とりあえず…

手足に力を込めてみる。そしたら、  
変化出来た。

簡単に。

みんな口を開けて驚いている。

「声は……聴こえないが？」

言うと權那が返事を返してくれる。

「そう？まあ、聴かない方が心身共にいいんだけどね」

「まあ、遊憂はエリートなんだな」

「そうだね。こんな速く変化できるなんて…」

「天才ってヤツかな？」

「なんかしつくりこないな…？」

「なんなのだろう？」

試しに指を鳴らしてみる。

すると、炎が蛇のようになつて、手の上に乗つかつてきた。

「なんか…愛らしいというか…」

「なんか、ビックリが連續する回だな…」

蟻が、手を見て、頷き喋り始めた。

「ま、能力はいろいろ在るみたいだな」

それを聞いた途端粕薬が、

「そうだ！訓練しない？ほら、能力を操るためにもさ」

おーいーなーと共感してくるいろは、蟻、權那。

「待て。本人の了承を得てからやれ。そういうのは  
オレの言葉を無視し、じゃあ、やるわ。という方向に話が進んだ。  
どうにかしなくては…」

訓練は正直、ヤダ。面倒臭いし。

「あっ、そうだ！オレ、頭痛いから、訓練は今度つて」と、「よー

## し訓練所いくぞー

あーあ……最悪。

最惡最惡最惡最惡最惡最惡最惡最惡最惡最惡最惡最惡最惡最惡最惡！—！—！

たがる……（泣）

さつきオレが出した炎の蛇が肩に乗り、頬を

その行為は、まるでオレを慰めているように思えた。

27

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8782z/>

---

アヤカシもどきの集う場所

2011年12月31日18時47分発行